

機関番号：32632

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520092

研究課題名 (和文) 古代中国・中央アジアの仏教供養者像に関する調査研究

研究課題名 (英文)

Research on the Buddhist Donor Figures in Ancient China and Central Asia

研究代表者

石松 日奈子 (ISHIMATSU HINAKO)

清泉女子大学・文学部・講師

研究者番号：80424307

研究成果の概要 (和文)：

平成 20～22 年度の三カ年で中国と中央アジア (新疆) の現地調査を実施し、俗形仏教供養者像の基礎データを収集した。主な訪問地は以下のとおり。

平成 20 年度：新疆ウイグル自治区博物館、新疆文物考古研究所、キジル石窟、キジルガハ石窟、クムトラ石窟、西安博物院ほか。

平成 21 年度：敦煌莫高窟、同西千仏洞、雲岡石窟、大同市博物館、河南博物院、焦作市博物館、麦積山石窟、陝西省考古研究院ほか。

平成 22 年度：西安碑林博物館、正定文物保管所、北京首都博物館、甘肅省博物館ほか。

調査データを整理・分析した結果、供養者像の表現とその意味や機能について、以下のような知見を得た。

- (1) 中国の供養者像は“肖像”というより一種の“理想像”である。
- (2) 供養者像は男女、老若、貴賤、僧俗などの要素で類型化された図像である。
- (3) 供養者像の人数や題名は、基本的には実在の供養者集団の状況を表していると思われる。ただし皇帝皇后供養者像の場合は、おそらく実在の皇帝皇后ではないと思われる。
- (4) 供養者像の服装は基本的には供養者自身の民族服であるが、支配体制や社会制度との関係で服装が利用される場合、必ずしも服装イコール供養者の民族とはならない。
- (5) 中国では供養者像を男女別に左右に分けて配置するが、新疆の石窟では男女混成である。
- (6) 中国初期の供養者像は同形同大の像を一行に並べる配置であったが、5 世紀末の洛陽では主従形式の供養者群像を前後に重ねる複雑な構図が出現した。
- (7) 民間の邑義や家族集団による仏教造像は、仏教信仰に加えて、現実的で社会的な目的を持っており、供養者像の表現はより重要であった。
- (8) 家族集団の供養者像では、故人となった家族が含まれることもある。
- (9) 6 世紀以降、墓葬美術のスタイルで表現された供養者像が出現し、仏教が葬送や祖霊崇拜の機能を兼ねていたと思われる。

研究成果の概要 (英文)：

I made a research in China and Central Asia (Xinjiang) during the year 2008-2010, and collected basic data of the Buddhist donor figures. The visited places are as follows.

Year 2008: Xinjiang Uighur Autonomous Region Museum, Xinjiang Institute of Cultural Relics and Archaeology, Kezil Grottoes, Kezilgaha Grottoes, Kumtula Grottoes and Xi'an Museum.

Year 2009: Dunhuang Mogaoku Grottoes, Dunhuang West Thousand-Buddha Grottoes, Yungang Grottoes, Datong City Museum, Henan Museum, Jiaozuo Museum, Maijishan Grottoes and Shaanxi Archaeology Institute.

Year 2010: Xi'an Beilin Museum, Zhengding Depository of Cultural Relics, Beijing Metropolitan Museum and Gansu Provincial Museum.

The investigation data brought the following knowledge on the representation, meaning and function of the donor figures.

- (1) Donor figure is a kind of “ideal figure” rather than “portrait” in China.
- (2) Donor figure was characterized by several factors of sex, age, social rank, priest or layman, etc.
- (3) The number of donor figures, the names recorded in their titles, these basically show the real situation of the donor group. But, in the case of the emperor-empress donor figures, I think those figures are not of the actual emperor-empress.
- (4) The costume of the donor figure is basically consistent with donor’s folk. But when the costume is used for a government and a social system, donor’s costume isn’t always equal with their folk.
- (5) In China, the donor figures were placed divided by sex. Meanwhile, in the Xinjiang caves, men and women donor figures were mixed.
- (6) Early China donor figures were represented in equal size images standing on simple line. After the late fifth century, there appeared the “master -attendant” style donor figures represented in various sizes with complex composition in Luoyang.
- (7) The many works donated by the “yiyi” (邑義) group or family group, had a social and practical purpose besides the belief of Buddhism. So, representation of the donor figures was more important.
- (8) In the donor figures of family group, there were sometimes included the deceased.
- (9) Since the 6th century, some donor figures were represented by the style like the tomb arts. In this case, Buddhism probably had a function of the funeral and ancestor-worshipping

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成20年度	1,200,000	360,000	1,560,000
平成21年度	700,000	210,000	910,000
平成22年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：仏教美術史、中国美術史

科研費の分科・細目：哲学・美術史

キーワード：中国、中央アジア、仏教、供養者、寄進者、石窟、造像碑、邑義

1. 研究開始当初の背景

中国仏教美術の供養者像については、これまで甘粛省の敦煌莫高窟や新疆ウイグル自治区のキジル石窟などの壁画の作例を中心に、様々な民族の特色ある髪型や服装に注意が向けられることが多かった。このため供養者像は、もっぱら製作当時の服飾資料、民族史料として扱われてきた。いっぽう、歴史学においては近年仏教造像銘への関心が高まり、文字資料から供養者集団の構成や姓名を分析して家族や社会の状況を読み取る研究がさかんになってきた。

そのような中で、研究代表者は、名前は漢族でありながら、衣服は胡服（遊牧服）を着ている供養者像が存在することに気付き、供養者像の服装がそのまま民族を表しているとは限らないことを確認した。つまり、漢姓の供養者像は、胡族皇帝に対する服従の意思表示として胡服で表現されたと考えられる。そこで、仏教供養者の表現を詳しく観察・分析すれば、宗教的な目的以上の内容を読み取

ることができると考えた。

2. 研究の目的

上記のような供養者像に対する視点を意識することで、従来の仏像を中心とする研究では見えてこなかった事実や情報が得られ、供養者像研究は仏教美術史の新たな研究手法として活用されるであろう。そこで本研究では、まず供養者像の作例をリストアップし、その基礎データを収集・整理することを第一の目標とした。さらに、供養者像を造形的な面から分析し、供養者像を表現する目的や供養者像の機能についても考察した。

3. 研究の方法

調査研究の対象地域は華北を中心とする中国、および新疆ウイグル自治区とし、年代的には南北朝時期を中心とする5～14世紀の作例をあつかった。まず、参考文献によって作例の所在地をリストアップし、現地調査を実施して供養者像の構成、容貌、着衣、題名

などを記録、合わせて可能な限り写真撮影を行った。調査データはパソコンで整理、保存している。

4. 研究成果

平成 20～22 年度の三カ年で中国と中央アジア（新疆）の現地調査を実施し、俗形仏教供養者像の基礎データを収集した。主な訪問地は以下のとおり。20 年度は新疆ウイグル自治区博物館、新疆文物考古研究所、キジル石窟、キジルガハ石窟、クムトラ石窟、西安博物院ほか。21 年度は敦煌莫高窟、同西千仏洞、雲岡石窟、大同市博物館、河南博物院、焦作市博物館、麦積山石窟、陝西省考古研究院ほか。22 年度は西安碑林博物館、正定文物保管所、北京首都博物館、甘肅省博物館ほか。調査データを整理した結果、供養者像の表現とその意味や機能について、以下のような知見を得た。

(1) 中国の供養者像は“肖像”というより一種の“理想像”である。仏像を造立することは単なる宗教活動ではなく、“公的な場”に自己を表現することでもあった。そのため、供養者は「こうでありたい」「こうであるべき」といった、理想化した自己像を求めた。したがって、表現された供養者像の容姿や服装は供養者の現実の投影とはいえない。供養者像や寄進者像における肖像性の問題は、今後インドや西洋の美術作品にも通じるテーマとして考えていきたい。

(2) 供養者像は男女、僧俗、老若、貴賤などの要素で類型化された図像である。個々の供養者の外見上の特徴や個性までを描き出しているわけではない。髪型や冠、衣服の種類や持物などによっていくつかの類型を区別しているだけで、供養者の顔はみな似通っている。唐時代以降になると、中国美術全体で写実性を意識した表現が見られるようになるが、供養者の個性の表現には至らない。

(3) 供養者像の人数や題名は、基本的には供養者集団の実際の状況を表していると思われる。たとえば、男性供養者像が少なく、女性供養者像が甚だ多い作例があり、この場合、実際の供養者集団の構成がそのようであったと見るべきである。体の小さい像や、双髻の髪型などは明らかに幼児や童子を表現しており、これも供養者集団の中に子供が含まれていたことを示している。また題名においても、「邑老」や「邑母」、「父」「母」、「息」「息女」、「孫」「孫女」など、現実の供養者の年令や家族関係を表記する例がある。

ただし、龍門石窟や鞏鼎石窟の窟門左右の壁に表されている「皇帝皇后礼仏図」については、実在の皇帝や皇后に特定することは難しく、“イメージ”としての皇帝皇后と見なすべきと思われる。

(4) 供養者像の服装は基本的には供養者自身

の民族服であるが、支配体制や社会制度との関係で服装が利用される場合、必ずしも服装イコール供養者の民族とはならない。たとえば、鮮卑族支配下の北魏では漢族供養者も胡服で表現され、北魏が漢化すると、胡族供養者も漢服となった。また、6 世紀半ば頃に機能的な西方系胡服が男性の間で流行すると、漢族も胡族もこれを着用するようになった。この場合、漢服男性は胡服男性より上位に列せられる。いっぽう、女性においては漢服を好む傾向が継続した。

(5) 中国では供養者像を男女に分けて左右に配置する。その際、本尊の左方に男性、右方に女性を配する。これは左方上位の中国的な価値観によるものと思われる。いっぽう、新疆の石窟では男女混成の供養者像が見られる。たとえば龍門石窟賓陽中洞とキジル石窟にはともに皇帝皇后供養者像が残っているが、龍門では皇帝と皇后を前壁の左右に分け、向かい合わせで表すのに対して、キジルでは皇帝皇后をセットで同じ向きに並べて描く。この違いについては、今後、男女神をペアで表すインド美術との共通性を探りたいと考えている。

(6) 中国初期の供養者像はヴァリエーションが少なく、同形同大の像を横一列に並べる方式が多い。しかし、5 世紀末の洛陽龍門石窟では、漢服をまとった主従形式の貴族供養者像が出現した。大人数の供養者集団を前後に重ねて配置する複雑な構図は、当時の洛陽で流行した絵画作品からの転用と思われる。

(7) 民間の邑義や家族集団による造像の目的は仏教信仰だけではない。造像供養という集団活動は国家や皇帝に向けて自己の集団を顕示する絶好の機会であった。中国では漢代に石碑が大流行したが、魏の曹操が立碑を禁じた後は長く石碑が作られなかった。しかし、仏教が民間に広がると、仏教という大義のもとで石像や造像碑を建立することが公認され、家族の記念碑的な意味をもった石像や石窟が造立されたのである。そこには一家の構成を供養者像で表現することが重要であった。

(8) 家族集団の造像では、供養者像の中に故人となった家族が含まれることがある。榜題には、存命している家族とともに「亡父」「亡母」「亡兄」「亡妹」などの語を姓名の上に記す。これらは現実の供養者ではないが、供養者家族にとっては欠かせない存在で、死者の追善的な意味合いもあったと考えられる。

(9) 6 世紀以降、墓葬美術のスタイルで表現された供養者像が見られるようになる。たとえば馬や牛車に乗る供養者像は、墓室に描かれる墓主一族の「出行図」に酷似している。このような作例では、仏教が葬送や祖霊崇拝の機能を兼ねていたと思われ、中国の土着信仰と混淆している。この点については、今後さ

らに中国の道教美術の寄進者像も視野に入れて研究する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

①石松日奈子 (楊效俊訳) 「中国古代石彫論—石獸、石人と石佛」、『考古与文物』(中国・西安)、2010年第5期、pp79-91

②石松日奈子 (篠原典生訳) 「龍門石窟和鞏県石窟の漢服貴族供養人像 — “主従形式供養人画像” 的成立」『石窟寺研究』(中国・洛陽)、査読有、第1輯、2010、pp82-99

③石松日奈子 「敦煌莫高窟第二八五窟北壁の供養者像と供養者題記」『龍谷史壇』、131号、2010、pp43-85

④石松日奈子 (牛源訳) 「中国仏教造像中の供養人画像 — 仏教美術史研究的新視点」『中原文物』(中国・鄭州)、2009年第5期、pp74-85

[学会発表] (計3件)

①石松日奈子 「中国南北朝期の仏教供養者像」東アジア初期仏教寺院の研究・講演会、京都大学人文科学研究所、2011

②石松日奈子 「敦煌莫高窟第二八五窟北壁供養者像について」敦煌壁画の保護に関する日中共同研究・研究報告会、中国・敦煌研究院、2010

③石松日奈子 「敦煌莫高窟第二八五窟北壁の供養者像と供養者題記」龍谷大学史学会、2009、龍谷大学

{その他} (計1件)

①石松日奈子 「中国と中央アジアの仏教供養者像—石窟寺院を中心に—」『古代中国・中央アジアの仏教供養者像に関する調査研究』科学研究費補助金研究成果報告書、2011、pp12-75

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石松 日奈子 (ISHIMATSU HINAKO)

清泉女子大学・文学部・講師

研究者番号：80424307